

(続紙 1)

京都大学	博士（人間・環境学）	氏名	大谷直輝
論文題目	A Cognitive Analysis of the Grammaticalized Functions of English Prepositions: From Spatial Senses to Grammatical and Discourse Functions (英語前置詞の文法化した機能に関する認知言語学的分析：空間的意味から文法・談話機能へ)		
(論文内容の要旨)			
本論文は、認知言語学の枠組みに基づき、英語の前置詞の文法機能と談話機能を考察した実証的研究である。全体は、8章から成る。 第一章では、本研究の研究対象となる前置詞の文法機能と談話機能について概観した後、英語の前置詞の統語的特徴と意味的特徴を考察している。次に、内容語と機能語の中間的な特性を持つ前置詞の二重的な特徴を考察している。 第二章では、まず前置詞の研究に関する三種類の代表的なアプローチ（語彙的アプローチ、認知語彙意味論のアプローチ、談話基盤のアプローチ）を概観する。特に本章では、以上のアプローチの特徴を、前置詞の研究における「連続性」の問題との関連で批判的に検討している。「連続性」の問題とは、前置詞の内容語としての意味的な用法から機能的な用法への拡張の問題である。本章では、これまでの多義性の研究では、前置詞の内在的な意味の分析が中心となり、前置詞の談話機能が明らかにされていない点を指摘している。本章では、上記の三つのアプローチのうち特に談話基盤のアプローチに注目し、前置詞としての語彙が持つ内在的な意味から談話的な機能に連続的に拡張していくプロセスを明らかにしている。本章では、このプロセスを、前置詞の <i>up/down</i>、<i>over/under</i>、等の空間認知に関わる前置詞の分析に基づいて明らかにしている。 第三章では、まず本研究での記述的な背景となる認知言語学の象徴記号的な言語観を概観した後、言語構造を動機づける二つの大きな基盤である、認知的な基盤と談話機能的な基盤を考察するための枠組みを提示する。認知的な基盤に関しては、人間の身体経験がどのように言語構造に反映されるか、また談話機能的な基盤に関しては、文法化をはじめとする様々なタイプの言語変化が生じる場としての談話の役割を明らかにしている。本章では、これらのアプローチとの関連で、新しい視点を導入した多義性の分析を試みている。特に本章では、前置詞の多義性の分析に際し過剰な一般化は避け、具体レベルにおける一般化を試みている。例えば、これまでのメタファー研究では、複数の語彙が〈空間→時間〉のように共通の拡張をする点が注目されているが、本研究では、類似した拡張における各語彙が示す認知的な意味の違いに注目する。例えば、前置詞の <i>at</i>、<i>in</i>、<i>on</i> には空間から時間へ比喩的に拡張する共通点があるが、時間的意味は空間的なイメージに基づいているため、各前置詞では時間が異なる存在として概念化されている事実（すなわち各前置詞の点的特性、空間的特性、密着的特性の違いを反映する時間に関する概念化の違いに関する事実）を詳細な言語データに基づいて明らかにしている。			

第四章では、これまでほとんど注目されてこなかった空間認知に関わる前置詞、等 (e. g. *concerning*~, *on*~, ~*aside*, ~*apart*, etc.) の文法化の機能を分析している。この種の前置詞、等の用法には、談話機能に関わる拡張的な用法が認められるが、この機能は定着度が低く、その前置詞の持つ内在的な特性とは見なされないため、従来の研究ではほとんど体系的な記述がなされていない。本章では、この種の前置詞の談話機能の発現のプロセスを分析している。同章では特に文脈内で、談話的な機能が文脈情報に補われることによって内容的な意味から拡張するプロセスを、認知言語学のプロトタイプ理論の拡張モデルに基づいて明らかにしている。

第五章では、*up* と *down* を含む不変化詞構文 (e. g. *He shot the lion up./He shot the lion down.*) を考察対象として、事態の完了を表す不変化詞のアスペク的な機能を分析している。不変化詞には、動詞が表す事態が完了したことを示すという機能があるが、この種の機能は不変化詞の内容的な意味から派生しており、各不変化詞が示す事態の完了のタイプが異なる。本章では、類義的な不変化詞構文における *up* と *down* の用法を綿密に分析し、*up* は一般的な完了を表すマーカー (英語の完了を表す助動詞 *have*) と同様に、意味の漂白化が進み動詞指向である一方、*down* は下方向への移動という内容的な意味を保持し、結果構文内の結果述語に近い性質を持ち目的語指向である点を究明している。

第六章では、帰結節の導入部の主要部として働く前置詞 *under* の機能を明らかにしている。この前置詞には、*Under the agreement, agricultural prices would be frozen.* のように、条件法を伴う帰結節の導入部の主要部として働く文法機能が認められるが、この文法機能は空間的意味から抽象的意味への拡張を介して派生する。先行研究では、この文法機能は支配的意味に分類されている。しかし、この用法は文の内部では支配の意味を持つと同時に、文脈内では条件法の帰結節を導く主要部となっている。本章では、支配の意味を持つ *over* と *under* の非対称的な意味拡張に注目して、*under* の文法機能が支配の意味を介して、基本的な空間的意味から派生する点を明らかにしている。*over* と *under* には共に支配の意味が認められるが、これらの前置詞は異なるタイプの支配を表す。*over* は直接的で意思を伴った支配を、一方 *under* は一般的な支配下に置かれた状態を表す。本章ではさらに、異なる支配の意味は異なるタイプの上下に関する経験に動機づけられている事実も明らかにしている。

第七章では、不変化詞 *aside* を含む二種類の構文を考察対象として、*aside* の談話機能を考察している。*aside* には、話題を転換して談話内に新しいトピックを導入する機能が認められる。二種類の*aside*-構文は、意味レベルでは〈何かを取り除く〉という類似した意味を表すが、談話レベルではその働きは厳密には異なる。本章では、広範な言語データ (BNC: British National Corpus) から *aside*-構文の定量的な分析を行い、二種類の*aside*-構文が、意味レベルでは〈何かを除外し、新しい何かを導入する〉という類義的な意味を持つが、談話レベルでは、除外されるものが旧トピックであるか、新トピックの一側面であるかが異なる点を明らかにしている。

第八章では、理論・実証の双方の観点からみた本研究の意義と今後の展望について論じている。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、英語の前置詞の文法機能と談話的機能の認知言語学的研究である。これまでの認知言語学の分析（特に認知意味論に代表される語彙の多義性に関する分析）では、語彙内部の複数の関連する意味が考察され、中心的意味から拡張された意味への分布関係が研究されてきている。この種の分析では、分析の範囲を意味論の範囲に限定し、語彙の内在的な意味を分析の対象としている。そのため、前置詞の多義性に関する従来の研究では、語彙が持つ静的な特性の分析が中心となり、本研究が明らかにしている、具体的な文脈における前置詞の談話的な機能や直示的な機能に関わる要因は分析の対象とされていない。

本研究は、従来の研究に対し特に次の点で独創性が認められる。

まず記述的な面に関し、本研究の独創性は、前置詞が持つ様々な機能を、文法的機能と意味的機能だけでなく、談話的機能、直示的機能に分類し、前置詞の具体的な用法に関する体系的な記述を試みている点にある。また、本研究では、文法化が進んだ前置詞の機能を単にリストアップするだけでなく、基本的な前置詞 (e. g. *over*, *under*, *up*, *down*) の用法の背景となる空間認知的な要因を考慮し、文法的、意味的に定着しているように見える前置詞の機能が、空間的なイメージに基づいて談話的、直示的な機能に拡張されていくプロセスを明らかにしている点が注目される。

次に、本研究で重要な点は、内容語と機能語の連続性を無視して、意味論的な研究に終始している従来の多義性の研究が持つ諸問題を「連続性の問題」から捉え直しているところにある。本研究では、前置詞としての語彙が持つ内在的な意味から談話的な機能に連続的に拡張していくプロセスを明らかにし、前置詞の語彙レベルにおける内容語的な意味から談話レベルにおける機能語的な意味への連続性を明らかにしている点が注目される。

さらに、これまでの文法を中心とする前置詞の研究に対し、本研究では、メタファーや主体化を可能とする認知能力が、前置詞の文法機能や談話機能の発現に関与する事実を明らかにするだけでなく、前置詞の意味拡張に関するきめの細かい分析を行っている点が評価される。例えば、従来の研究では、空間認知に関わる前置詞の *at*, *in*, *on* の空間的意味から時間的意味への拡張の一般的なプロセスは分析されているが、これらの個々の前置詞が喚起する認知的な意味の違いの詳細な分析はなされていない。これに対し本研究では、この種の前置詞はすべて時間的な意味でも使われるが、各前置詞が喚起する時間のイメージは異なる点を明らかにしている。例えば、前置詞の *at*, *in*, *on* には空間から時間へ比喩的に拡張する共通点が認められるが、時間的意味は、空間的なイメージに基づいているため、各前置詞では、時間が異なる存在として概念化されている事実（すなわち各前置詞の点的特性、空間的特性、密着的特性の違いを反映する時間に関する概念化の違いに関する事実）を詳細な言語データに基づいて明らかにしている。

方法論の観点から見た場合、本研究は、従来の言語学で多用されてきた最小対の語彙比較の認知的分析手法を精緻化し、関連する前置詞の最小対の綿密な対照分析を試

みている。本研究はこの分析手法を採用することにより、一見したところ意味的に同種の振る舞いをするとは仮定される前置詞間の意味機能の違い (e.g. *above/over*, *below/under*) や空間認知的に対称的に見える前置詞の意味機能の違い (e.g. *above* vs. *below*, *over* vs. *under*) を、上下の空間関係、空間的な距離、重力の方向性、等に関わる言語主体の空間認知や身体経験を特徴づける制約に基づいて明らかにしている。

以上は、本研究の質的な方法論の新しさを示すものであるが、本研究は、量的な方法論に関しても新しいアプローチを試みている。近年、コーパス言語学を中心とする量的な言語分析が盛んに試みられているが、この方面の研究では、表層的な語彙の分布関係に注目するコーパス分析が中心になっている。これに対し、本研究では、意味に注目したコーパス分析の方法論を試みている点に独創性が認められる。そのケーススタディとして本研究では、*aside* に関する大量のコーパスのデータを解析し、個々の代表的な用法に関する意味のタグ付けを行うことにより、*aside*-構文の意味機能と談話機能を明らかにしている。従来のコーパス言語学の研究は、語の表層レベルにおける共起関係の解析に限定されている。これに対し本研究では、表層レベルの統語情報だけでなく意味情報を考慮することで、*aside*-構文の言語文脈における意味機能と談話機能の一面を明らかにしている。この点で、本研究の分析は、今後のコーパス言語学の研究に重要な知見を提供する。

本研究では、主に空間認知の身体的経験に根ざす英語の前置詞の多義的な拡張関係に関する分析が主眼となっているが、本研究で得られた前置詞の多義性に関する研究成果は、英語教育と言語習得の関連分野にも重要な知見を提供する。本研究では、前置詞の多義性の通時的な変化の研究はなされていない。前置詞の多義性の拡張プロセスと通時的な意味変化の関係の解明は、今後の課題として残されるが、本論文の多義性に関する研究成果は、後者の通時的な意味変化の研究のための基礎研究としても重要な役割を担う。

本申請者が所属する言語科学講座の目的の一つは、言語の構造、意味、運用、等にかかわる人間の知のメカニズムの解明にあるが、本研究は、この目的に沿った基礎的研究として高く評価できると共に、今後の言語学と認知科学への貢献がさらに期待される。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成24年6月19日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

Webでの即日公開を希望しない場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。
要旨公開可能日： 年 月 日以降